

ゼロ年代以降のゴシック文学研究書誌

金 崎 茂 樹

Selected Bibliography of Criticism on Gothic Literature since 2000:
Annotations and Commentary

KANASAKI Shigeki

Synopsis

Scholarly studies or criticism on Gothic literature are said to have substantially progressed since the 1970s, the decade right after new academic approaches such as structuralism and post-structuralism were adopted in the field of literary criticism. Many articles on the Gothic have been continuously and extensively published since then, the number of which was so large that almost all of the articles were collected, surveyed and rearranged by Frederick S. Frank's *Guide to the Gothic: An Annotated Bibliography of Criticism* (1984). The second volume of his book appeared in 1995, and the third in 2004, dealing with a greater and greater number of Gothic-related research articles. Needless to say, his laborious works are very useful for both scholars and beginners, but it is a bit regrettable that the space assigned to the books made his annotation of each study very limited. Therefore, the aim of this paper is to select some of the remarkable criticism of the Gothic since 2000, to provide additional commentary, and to show the academic trend in this genre.

キーワード：ゴシック文学, ゴシック研究, ゴシック文献

key words : Gothic literature, criticism of the Gothic, bibliography of the Gothic

はじめに

一部の熱狂的好事家を除き、マイナージャンルとして等閑視されてきたゴシック文学も構造主義あるいはポスト構造主義と呼ばれる脱領域的な知の転換期以降、本格的には1970年あたりから積極的に研究対象にとりあげられてかなりの興隆を見せている。数量的には1980年代から一気に飛躍し、アプローチも多岐に亘るようになっていった。それだけ混迷の度合いも深まっていくといえるのだが、果たして早くも1984年にそれまでのゴシック研究を網羅的に整理したFrederick S. Frankの*Guide to the Gothic: An Annotated Bibliography of Criticism* (Metuchen, NJ: Scarecrow, 1984)が登場する。日本では書誌研究は比較的傍流の位置づけがなされているかもしれないが、欧米では歴と確立された学術分野で博士論文としても通用するものであり、Frankの労作は評価が高く利便性も大きい。

Frankはそれ以後およそ10年ごとに同じくScarecrow社から1983年から1993年までの研究を紹介する第二巻(1995)、1993年から2003年までの第三巻(2004)を上梓する。第一巻は420、第二巻は540、そして第三巻が前二作の項目の縮約版も含むとはいえ1230ページ程と、量のうえでは世紀を跨ぐ10年が圧倒的であり、ゴシック文学のアカデミズム化(またはアカデミズムの大衆化)がいつそう進み、現在に至るまでもまさしく百花繚乱ともいふべき状況が続いているといえるだろう。

Frankの粘り強い精査に対抗するつもりはもちろんだが、紙幅に限りがあるとはいえ、各論考に対して数行の注解で済まざるをえないので物足らなさは否めない。そこで本稿は目立ったゴシック研究をとりあげ、そこにもう少し概説や解題を加え、ますます学際色豊かになっているアカデミックな研究動向を把握することを目的としたい。なお選択の目安として特定の作家に関する研究ではなく、通時的であれ共時的であれゴシック文学全体と関係のある書をとりにあげている。また、基本的に年代順に並べているが、2000年以降で出版年の古い書であっても新たに加えるべきなら追加していくことにする。したがって時間的に前後する場合があります、通し番号は便宜的なものにすぎない点を付記しておく。

- (1) Smith, Andrew. *Gothic Radicalism: Literature, Philosophy and Psychoanalysis in the Nineteenth Century*, Basingstroke, Hampshire and London: Macmillan, 2000.

ゴシック文学とバークやカントの崇高理論、さらにフロイトの「不気味なもの」との関係を探る論考である。ゴシック的主体は極限状態における精神崩壊の危機にさらされる場

合があるが、それは崇高論や「不気味なもの」論にもみられる。ゴシック文学と諸理論の主体との関係を巡って、メアリ・シェリー、ポー、ステイーヴンソン、ブラム・ストーカーが検証される。

著者のアンドルー・スミスはこの観点から主に5つの先行研究を取りあげている。すなわち、Rosemary Jackson の *Fantasy: the Literature of Subversion* (1981), Terry Castle の *The Female Thermometer: Eighteenth Century Culture and the Invention of the Uncanny* (1995), Vijay Mishra の *The Gothic Sublime* (1994), David B. Morris の “Gothic Sublimity” (1985), Clive Bloom の *Reading Poe Reading Freud* (1988) である。これまでの流れを把握する意味でもこれら批評家の研究に対するスミスの論評をまとめてみよう。

まず Rosemary Jackson による、主体を精神分析的に理論化する試みはバークやカントにもあった。ゴシック的主体と崇高体験者とを同じ土俵にのせた点を評価している。

次の Terry Castle に関してだが、その研究によると「不気味なもの」も18世紀に起源を持つ。たとえばアン・ラドクリフの幽霊は心の投影であるように、超自然が無意識の領域に再配置されるからである。だが Castle はバークやカントによるラドクリフへの影響をほとんど無視しているが、彼らの崇高理論をゴシックの伝統に組み込めば、「不気味なもの」の登場と、ゴシックが極限状態に魅了される理由を説明できるのではないかとスミスは説く。その狙いはゴシック文学、崇高理論、フロイト理論の相互連関にある。

崇高とゴシックの関係を扱う Vijay Mishra の研究は、ゴシックが「不気味なもの」を予兆していく過程を理解するための一助になる。Mishra の企図のひとつに、なぜ初期のゴシック作品は同じプロットを使用し、登場人物の名前を再利用しているのかという、形式的な反復要素の存在を説明することがあったが、そうした反復とは「不気味なもの」一知知っているのに知らないもの一だといえるだろう。全ての歴史はすでに演じられたもので実は何も起こってはず、主体は絶えざる反復に閉じ込められるといった認識としてゴシックを読むのなら、これは崇高の書き直しにもつながっていくと Mishra は見る。崇高といえたいいロマン派と関連づけられてきたが、（後に出てくる）David B. Morris の向こうを張ろうと、Mishra はロマン的崇高とゴシック的崇高は違うものだと考える。だがゴシック的崇高は正当であるロマン派的崇高との対立によって規定される補完的存在なら〈独立した崇高〉という考えに矛盾が生じるだろう。そこで Mishra が持ち出すゴシックの特徴は、（ゴシックが崇高を、ではなく）正統派の崇高がゴシックを飲み込むという恐怖そのものがゴシックの力になる点にある。（ロマン派と異なり）ゴシックの文脈では崇高は「不気味なもの」、「不気味なもの」は崇高になるのである。スミスは Mishra を受けて、

独立したゴシック的崇高という考えを発展させて逆にロマン派的崇高を書き換えていくゴシックを追う。

Mishra と違って David B. Morris はゴシック的崇高がロマン派の一変種であると主張する。彼の論考は、崇高理論そのものに内在する矛盾をゴシック的崇高が批判していくものとしてとらえているが、それは正しい。ゴシック小説においては崇高理論の不備が批判的に誇張されるからである。つまりここでの対立軸はゴシック文学と崇高理論である。また Morris はゴシック的崇高を「不気味なもの」の潜在的形式として考えている。初期のゴシックは近親相姦にとり憑かれているからで、近親相姦テーマの反復が「不気味なもの」を呼ぶ。さらに崇高理論で言及されていないものは欲望だという。パークは崇高の源泉はまず恐怖だとしているが、Morris からすると、不安や混乱を生み出すのは欲望である。恐怖の根源は愛欲なのだ。ここに Morris の独創的な見解がある。Morris に至ってゴシック的主体と「不気味なもの」が直接関係づけられることになった。一方、Mishra にとって「不気味なもの」はあくまで崇高の修正版にすぎなかったが、Morris による「不気味なもの」は崇高（の根幹である恐怖）が隠蔽している欲望をあらわにするのである。

ポーがフロイトの先駆であるというのが Clive Bloom の主張である。ここではポーと精神分析の関係が深められているとはいえ、Terry Castle と同じく崇高理論が周辺に追いやられている。ポーの読みにも崇高を取り入れようとするのがスミスのアプローチである。

スミスは、以上の論を踏まえて崇高論とフロイトのさらなる開拓を試み、それぞれが共有している問題点に光を当てていく。そして歴史的にみて、ゴシック文学がそうした理論的不備を批判していると主張していくのである。書名が『ゴシックラディカリズム』と題される所以であろう。

本書の第一章では、ゴシック的主体が崇高理論や精神分析における自己に比せられることが説かれる。ロンギノス、パーク、カント、そして現代の研究者 Thomas Weiskel の *The Romantic Sublime: Studies in the Structure and Psychology of Transcendence* (1986) が検討される。

第二章は『フランケンシュタイン』がパークの崇高に内在する限界を明るみにしていく様を追っている。パークが「自然」に与えた特権的立場がシェリーのこの小説では非難されるからである。またフーコーの唱える近代性、すなわち知の対象物としての「人間」の創造が近代の到来の証というわけだが、それとフランケンシュタインによる怪物の創造が関係づけられる。さらにクリステヴァの主体形成理論と怪物創造との類比も探られる。

第三章では、メアリ・シェリーの2短編を手掛かりにして、19世紀初期の崇高がロマン派の古典思想への依存によってどのように弱められていくかが探られる。

第四章はポーが占める。複雑な都市体験を暗に語るために『アーサー・ゴードン・ピム』は共同体のイメージやミステリーの要素を用いているが、広く見ればこれは都市空間そのものが謎であり、ポーによるカント流の崇高の改訂ととらえることができる。

ポーの探偵が謎に対するのと同じ態度をカント的主体は崇高に対してとっている。第五章はその際の理性に対しての相違に焦点を当てる。カントにとって理性の世界は崇高と関係づけられるが、ポーはそうした含みを存分に展開して探偵の精神世界の領域まで拡大した。たとえば「催眠術の啓示」のような作品はカントの物自体や現象界といった概念の探求でもある。またポーはロマン派を振り返りつつもフロイトの精神分析による自己探求を予期してもいる。

第六章はストーカーの『ドラキュラ』がフーコーの『性の歴史』におけるヴィクトリア朝のセクシュアリティに関する記述を通じて読まれる。『ドラキュラ』はとりわけ性を取り込んだ崇高を展開させて、「無意識」の厄介な機能とも関係をもたせる。確かにこの小説による崇高の書き換えはフロイト的な場へと向かってはいるが、さらなる無意識の探求までは至らなかったとスミスは言う。

フロイトの論考「不気味なもの」を検討すれば、フロイトが崇高のモデルを改訂したことは明らかである。最終章では「不気味なもの」を装った崇高が、『夢判断』や『日常の精神病理学』において理論的な不安材料となっていることが論じられ、スティーヴンソンの『ジキルとハイド』を読むことで、今度はフロイトの理論的瑕疵が例証されていく。本書でのスミスの一貫した主張とは、ゴシック文学が一連の理論を批判しているということなのだ。

(2) Robbins, Ruth and Julian Wolfreys, eds. *Victorian Gothic: Literary and Cultural Manifestations in the Nineteenth Century*, Basingstroke, Hampshire and New York: Palgrave, 2000.

狭義のゴシック文学は、ウォルポール『オトランド城』（1764）からメアリ・シェリー『フランケンシュタイン』（1818）あるいはマチューリン『放浪者メルモス』（1820）あたりまでを下限（近年ではド・クインシー『阿片常用者の告白』（1821）とする説もある）とするおよそ56年間の作品を指すが、その時代はヴィクトリア朝（1830-1901）に突入する前に終わっている。

編者の一人である Julian Wolfreys は序文でオースティンの『ノーサンガー僧院』に事

寄せて興味深いことを言っている。この作品はゴシック小説のパロディとして名高いが、出版は1817年とゴシックの終盤期でありながら執筆時期（1798-9）はゴシック文学の全盛期であった。全盛期にすでにパロディの対象になっていることもさりながら、そもそもパロディとは過剰、異分子、断片化、狂乱などの怪物性を孕むものだとすれば、ゴシック文学はすでにこうした要素が内在している（つまり『ノーサンガー僧院』はパロディのパロディである）。ゴシックというジャンルは不純な感性というか自ら巣食う腐敗によって活性化される、そういうジャンルだと、Wolfreysはおおよそ以上のようなことを述べている。

つまりゴシックはすでに動き始めた瞬間から死へと向かっていった。それが1820年前後で一度その生命を終えることになったのだが、幾度となくゴシックは回帰するという認識から、ヴィクトリア朝におけるゴシックに関する12の論考をまとめたのが本書である。Wolfreysに限らずゴシック研究者の叙述はどこかゴシック的な語り口や文彩（例えばゴシック文学を幽霊に譬えるところなど）を帯び、ゴシックの伝播力、いやむしろその感染力に個人的に注目したいのだが、ともかく1820年代以降、総体としてのゴシックは解体、断片化されながらも継承されていく。

それゆえというべきか、本書収録の各論もテーマや視点は総体的なものというより、特化（断片化）されている。喜劇的側面、科学技術、主体性、視覚芸術や写真、コロニアリズムやジェンダー、出版形態、児童や青年期の表象などとゴシックの関係が扱われる。対象人物もディケンズ、レ・ファニューや世紀末のリチャード・マーシュ、ブラム・ストーカー、ヘンリー・ジェイムズたちは予想内だが、ワイルドやH・R・ハガードなどと共に、なかにはメアリ・エリザベス・コールリッジ、ウィリアム・モリス、女性写真家ジュリア・マーガレット・キャメロン、詩人G・M・ホプキンスや美術評論家ヴァーモン・リーといった意外な顔も交じる。

このような多彩な顔ぶれやテーマ自体が、ヴィクトリア朝のゴシックはもはや墓地や城といった、いかにも出そうな場ではなくあらゆるところに出現するというを示している。編者のWolfreysは「狭義のゴシックが、ワイルドのバンベリー 【『まじめが肝心』の登場人物】 やコンラッドの無政府主義者の爆弾のように破裂するとすれば、その破片はヴィクトリア朝にあまねく行き渡った」と言う。ゴシックそのものがわかりやすくそこにあるわけではない。姿を変え、予感や痕跡として、喜劇や写真、中世回帰やオリエンタリズム、メスメリズム、消費行為や内なる他者の中に潜んでいる。あえてヴィクトリア朝のゴシックのキーワードを述べるなら「拡散」と「断片」であろうか。本書のそれぞれの論考は、そのぶん潜在的な恐怖を取り込み、身近でありながら不安を散りばめるヴィクトリア朝のゴシックを追求

している。

(3) Gamer, Michael. *Romanticism and the Gothic: Genre, Reception, and Canon Formation*. Cambridge and New York: Cambridge UP, 2000.

ジャンルとはあらゆる文学史の動力源である、または、ジャンルに属さないテキストは存在しないといった1980年代以降のポストモダニズムの主張があったが、著者ガマーはそうした風潮に掉さしながらも、読者や出版社、批評家がテキストのジャンルを決めるといふ、さらに実践的な解析のスタンスをとる。

ガマーの論考は、「ゴシック」や「ロマンティック」という語が現代と同じ意味をもつ以前、すなわちゴシック文学というジャンルの成立前夜である18世紀後期から19世紀初期に注目することでロマン派とゴシックの関係を探る。特に受容という観点からジャンルを見ることが有益なのは、作者と読者がテキストジャンルを意識的に認定していく瞬間を取りだせるからだと言っている。

注意すべきは、現代の文学史ではこの時代のゴシックといえば小説を指すことになっているが、当時の読者は現代と異なりゴシックは小説だけだと考えていなかった。1794年以降、戯曲もバラッドもゴシックに含まれた。それゆえ当時のゴシックはジャンル様式として見るよりもむしろ美学としてとらえるべきである。英国で小説として登場してから1790年代後期に戯曲や詩へと広がる様子を歴史的に追跡することでカテゴリーとしてのゴシックを俎上にのせることがガマーの狙いである。

一方で、1790年から1820年といえば伝統的にはロマン派の時代と考えられる数十年でもある。ガマーはロマン派の発展はゴシック受容への反応として見るべきだと説く。またロマン派時代には「ロマンティック」といえる作品は量的には実は多くない。したがって「ロマンティック」も「ゴシック」同様に時代を指すのではなく美学としての用語がふさわしいとしている。

ゴシックの人気の優勢であるにもかかわらず、この時期をロマン派時代と呼ぶことがあっても、ゴシック時代と言わないのはなぜか。高等文化としてのロマン派がゴシックを駆逐したからといえそうだが、ゴシックに対して、読者、作家、論評家が加担したイデオロギーも潜んでいるだろう。19世紀初期のかなりの作品がゴシックと関連づけられるのをあからさまに拒否しているのは偶然ではない。「低俗な」ゴシックは、拒否すべき美学として、高等な文学の構築を目論むロマン派に憑りついているのである。

たとえばコールリッジ、ワーズワース、ジョアンナ・ベイリー、バイロンらロマン派はゴシックを批判しているが、同時にコールリッジ「クリスタベル」(1778-1800)「老水夫」(1797-8)、ワーズワース「ゴシック物語断章」(1797)や超自然のバラッド(1798-1880)、ベイリー『ド・モンフォート』『レイナー』(1796-8作)、バイロン『チャイルド・ハロルド』(1812)『異教徒』(1813)などゴシックの影響が濃厚な作品を上梓していて、関係の曖昧さがうかがえる。

ゴシックが他の高等な様式へ取り込まれる過程を追う際にガマーがとる作業仮説は、ゴシックと他の様式との文化的な差異が大きいほど、ジャンルの汚れ、崩壊、逸脱とみなされる場合が多くなるということである。たとえば「女性的」と考えられたソネットがゴシック化するより叙事詩をゴシック化するほうが逸脱的で危険視されたのである。

このようにガマーがジャンルと受容にこだわるのは、受容の歴史を追跡すればジャンルの展開と変容が理解できるという考えに基づいているからだ。とりわけこうした取り組みが重要なのは、たいていの作家が読者のみならず勢い盛んな雑誌産業の論評家でもあった時代がイギリスの18世紀後期だからである。そしてゴシックは人気の大きさに反して好意的な批評が少ないが、そのせめぎ合いから逆にロマン派のイデオロギーが照射されるからである(この時のゴシックに対する評価—「未熟」「女性的」など—は1970年まで支配的であった)。

本書の構成は、序章と五つの章からなる。序章はワーズワースの詩「サー・ジョージ・ポーモントの描いた嵐の中のピール城に触発されて書いたエレジアック・スタンザ」がいかにゴシック的素材を使用しながら形而上学的思索へと高められていくかが例証されるが、「趣味^{テイスト}」や「ピクチャレスク」といった美学的イデオロギーと「ゴシック」との関係が検討されている。

第一章は文学受容理論、創造理論が探られ、その理論モデルを当時人気絶頂であったゴシックへ適応していく。

第二章は、書店、論評家、英国国教会などの多様な文化的制度がゴシックをどのように見なしているか、さらにゴシックがジャンルとして認知されるさまを追う。

以後は各個論ともいべきものだが、「高等」文化やロマンティシズムとの関係が深いワーズワース(詩)、ベイリー(戯曲)、スコット(小説)のゴシック受容が分析されていく。筆頭をワーズワースにしたのはロマン派の王道を行くだけでなく現代の批評においてゴシックとの関係についての記述が最も少ない詩人だからである。第三章では1796年以後のゴシックとドイツの超自然的なバラッド作者ビュルガーの突発的な流行に対する反応として彼の『リリカル・バラッズ』第一版、第二版が読まれる。

第四章は舞台へと目を転じて、ジョアンナ・ベイリーの戯曲を取りあげ、いやますばかりのスペクタクルで超自然的な劇場芝居に対する関係が検証されていく。

最終章である第五章は、マシュー・ルイス派から古物研究者、そして国民的詩人へと変貌を遂げていくウォルター・スコットに注目することで、初期に自身が手掛けたドイツ詩の翻訳と模倣作との危うげなその後の関係や、大衆的ロマンス作家になることがどのようなことであるのかについてのスコットの終生の不安が探られる。スコットへの分析を拡大して、作家自身であれ編集者または批評家によるものであれ、ロマンティズムというイデオロギーの純粋性を保つためにはゴシックから距離をとることが必要であったというガマーの指摘は、これからのゴシック研究で一考に値するといえるだろう。

(4) Smith, Andrew and Jeff Wallace, eds. *Gothic Modernisms*, Basingstoke and New York: Palgrave, 2001.

ゴシック文学とモダニズムとの関係を探る寄稿集である。単著と異なり、全体に通ずる包括的な問題意識への視座に欠くがそのぶんバラエティーに富む12人の論評が集う。これまで両者の関係が研究対象としてないがしろにされてきたことに対して一石を投じるものとして評価できる。

そもそもゴシックは大衆と、一方のモダニズムは文化的エリートとの結びつきが強かったことに一因があるが、文化的排他主義というモダニズムの身振りは、日常へのまなざしの中に深遠な世界を見出すという点では逆説的でもある。その世界はいわばゴシック的領域ともいえるからで、現実に関する疑義を提起するために不条理なものを探求していく態度はどちらにもある。

すでに指摘されていることだが、英国モダニズム文学は19世紀末のゴシックホラーやセンセーション小説、SFといった大衆小説に端を発する革新的ともいえる反リアリズム主義への関心は持ち続けていた。また道德の危機として退化理論の関心も共有していた。たとえば、スティーヴンソン『ジキルとハイド』、ウェルズ『モロー博士の島』、ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』における退化への恐怖は、モダニストであるロレンスの『息子と恋人』における肉体とアイデンティティへの問題意識に通じる。

また倒錯、逸脱、タブーなどのゴシック的テーマは精神分析の登場を先取りしている。主体は制御できない欲望に動かされるがゆえに自らをコントロールできないといった、不安定な自己がモダニズムに与えた影響は大きい。さらに世界とは象徴的につながっていると

いうモダニズムの主張とフロイト理論の共通項は、フィクションとは嘘であるが真実を告げるといふ認識にあるが、それは『ドラキュラ』の結尾で触れている、事件の外的証拠の欠如といった事態にも言えることである。

むろんこれだけにはとどまらないが、ここで各論の概要一牽強付会なところも時があるが一を以下にまとめてそれぞれの関心の所在を確かめておくほうがわかりやすいだろう。

第一章の David Punter はウォルター・デ・ラメア、エリザベス・ボウエン、T・S・エリオットを取り上げて、一連の極限状態のイメージを考察することでモダニズムにもそうしたゴシック性が内在していることを説く。

第二章である David Glover の論考は過渡期をなす2作、コンラッド『闇の奥』(1899)とフォード・マドックス・フォード『後継者』(1901)における大衆ジャンルとの複雑な関係に注目し、作品中にある、文明の円熟形態は野蛮状態ではないかといった歴史の危機意識を探っている。帝国主義的ゴシックや科学ロマンスをモダニストが使用することで、未来を惨禍としてとらえる可能性が開かれると Glover は判じている。

ヴァージニア・ウルフは有名なレヴューで、見えないものの超越的な感覚を喚起させようとする点でゴシックは重要だと述べていたが、第三章の David Seed はウルフやメイ・シンクレアが知覚という問題を組上にのせるために超自然をどのように利用しているか、またゴシック的な用語を駆使しながらもモダンなものへとどのように昇華しようと試みたかが分析されている。

続く第四章でも Judith Wilt がウルフを取り上げているが、意識や理性が溶解していくイメージを自らの文章で表現するのにウルフがゴシックを使用していると論じる。モダニスト的自己のおぼつかなさを示すために、ゴシックはウルフに憑依のモデルを提供しているという。

ジューナ・バーンズ『夜の森』(1936)の分析を試みる Avril Horner と Sue Zlosnik の共著である第五章は、本作が逸脱のモデルとしてゴシックに依存しながら、散文と詩、直線的な語りと夢想、ユダヤ人と非ユダヤ人、男性と女性、人と動物などの境界に揺さぶりをかけていくさまを追う。またエリオットやジョイス、ウルフにとっては遊歩のための都会であったが、バーンズにとっての都市は、不条理を孕む心の内面とも重ね合されるべきゴシック的迷宮として描かれていると指摘している。

第六章も同じくジューナ・バーンズに注目している Deborah Tyler-Bennett は、作家の描く恋人たちに焦点を当て、コールリッジ、レ・ファニユ、ブラム・ストーカーらと共鳴していることを明かす。また『夜の森』がドイツ表現主義映画『カリガリ博士』や『吸血鬼ノスフェラトゥ』からの影響がみられ、ゴシックとモダニズムの実験的な美学の存在が

確認される。

第七章で Jeff Wallace はジョイスの『ダブリン市民』（1914）にみられる経済制度が、マルクスのいう「吸血鬼的な資本」よろしく、人間関係を蝕み、道徳的空虚や人間疎外を生み出していくと考え、ジョイスにおけるゴシックの遺産を再定義する。

Kelly Hurley は第八章でゴシック的な恐怖の枠組にダーウィニズムを配することで、退化した人類とでもいうべき雑種の創造を果たす物語、ウィリアム・ホープ・ホジソンの『ナイトランド』（1912）の分析を通じて、これまで慣例的であった人間という概念を崩すために作家がいかに反リアリズム的な手法を駆使しているかを追求している。またホジソンの怪物造形は『ドラキュラ』と『タイムマシン』から想を得ていることが説かれる。

Andrew Smith の論考が載る第九章では、D・H・ロレンスを19世紀後期の退化理論の文脈におくことで、ロレンスがゴシック的なイメージ、とりわけ吸血鬼のイメージを階級、性といった問題軸とからめていくのが分析される。『息子と恋人』に多くが割かれる。

「渦巻派」として知られるウィングダム・ルイスとゴシックとの関わりを考察する第十章の Francesca Orestano は、反模倣、反ロマンスを標榜するルイスが、グロテスクなものに魅了されるゴシックの系譜との強い親和性を示しているという。その「新しい」美学は、断片、暴力、心霊主義、氷原などに取り囲まれているが、その際にゴシックの伝統を再利用していることがわかるだろう。

フリッツ・ラング監督『メトロポリス』（1926）で使用されるゴシックイメージが未来設定の舞台にどのように関わっているかを検討しているのが第十一章の Nigel Morris である。映画のゴシック的要素はあからさまにフランス革命と結びつくが、産業組織や国家権力の中央化といった過度の合理主義のみならず、野蛮な群衆への不安を語ることで、それが近い過去のロシア革命、ひいては将来のホロコーストをも喚起させると述べる。ラングの映画をモダニズムの産物であると同時にゴシックの副産物として位置づけ、両者の複雑な関係が紐解かれる。

掉尾を飾る第十二章の Julian Wolfreys の論考も映画に関するもので、「幽霊はテキストに痕跡を残す」というデリダの考えが30年代以降のハリウッドのゴシック映画全般、とりわけビリー・ワイルダー監督の『サンセット大通り』（1950）に適用される。ヨーロッパ起源の不気味な演出によって、ヨーロッパという他者の霊がアメリカに憑りつき、ひいてはフィルム・ノワールへ溶け込むさまが語られていく。

ヴィクトリア朝との関係を探る研究書（2）でもそうであったが、本書も予想外の発見へと読者を導くことも多い。だが、そこには単なる思いつきととられかねない恣意的な比較作業の危険も時にはともなう。論点の軸がぶれると、どの時代もゴシック的要素は存在

するのだといった、内実の乏しい主張だけが残ることになるが、めったにない試みである本書に対しては、モダニズムの作家作品とゴシックの意外な結びつきに驚くべきだろう。